
サイボーグ (Cyborg)

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイボーグ (Cyborg)

【Nコード】

N9195A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

あらすじはプロローグにあります。そちらを御覧下さい。——打ち切り

ブローグ

15年前、日本は事件大国になってしまった。

その為、銃が普及しだし、日本は銃社会になった。

が、その所為で、銃を使った犯罪が、やたらと起きる様になってしまった。

警察組織は、それを事前に防ぐべく、ある対策を取った。

が、それらは全て水の泡となってしまった。

そこで、日本防衛軍は、「GAT」と言う組織を作り、人類をロボットに変え、銃で死なない体にしてしまおうと言う計画を立てた。だが、それには条件が必要だった。

最早、完成間近のサイボーグに将来を託すしか無いのだろうか？

奥村 真理絵

「大変大変！遅刻しちゃう！」

いま焦っているのは、この話の主役・奥村 真理絵である。

真理絵は、東京の水利高校すいりこうこうに通う女子高生である。

彼女は、タレントの芳賀 はが 優里亜ゆりあと瓜二つで、クラス一番の人気者である。

でも、そんな彼女が、cybernetic organism（サイバネティックスの有機体）である事は、誰も知らない。

勿論、家族や親戚もだ。

と言っても、彼女の親戚達は病気で他界し、両親は夫婦喧嘩の際に殺し合いになって他界してしまっている為、ずっと一人暮らしなのだ。

真理絵は、制服に着替えると、走って学校へ向かった。

「（全く、こんな時に目覚ましが壊れるなんて。）」

「キーンコーンコーンコーン」

学校のチャイムが聞こえた。

「（あ、完全に遅刻だ。）」

真理絵は、遅刻だと言う事が解ると、走るのをやめてゆっくり歩く事にした。

「おう、真理絵じゃねえか。」

真理絵が歩いていると、後ろから声が聞こえた。

真理絵は立ち止まって後ろを向いた。

そこには、一人の男が立っていた。

彼の名は黒崎 新一。世界各国で有名な高校生探偵だ。

新一は、男の中の男、水嶋 ヒロ君に似ているらしく、女の子にはモテモテである。

その所為もあってか、新一の家にはファンレターやラブレターが何億通以上送られて来る時がある。

だが、その内のラブレターは全て、真理絵の手によって処分されてしまっている。

真理絵は、新一がモテるのが気に入らない上に、新一を自分だけの物にしようと考えているらしい。

その為、新一が何処かへ行く時は、必ず付いて行く事になっている。

「あら、新一君も遅刻？」

真理絵は首を傾げながら聞いた。

「いや、今日はサボりだ。」

「新一君、駄目だよ。学校はちゃんと行かなくちゃ。」

「ボン！」

真理絵の鉄拳が新一の腹に決まった。

「うつ！？」

かなり痛い様だ。

「それでも行かないと言うなら、もう一度やるよ？」

真理絵は新一の耳元で囁いた。

「わ、解った。行くよ、行けば良いんだろ？」

「うん！」

真理絵はニツコリ笑って頷いた。

こうして、二人は一緒に学校へ向かった。

新一は、未だに腹を抑えている。

「ごめん、そんなに痛かった？」

「痛い・・・お前の腹パンチは特別強烈だ。完治するまで一日は掛かる。」

それはそうだ。真理絵は手加減と言うものを知らないからな。

「わざとじゃないの。本当にごめんね。」

「もう良いよ！」

「酷い。新一君、私の事許してくれないんだ？」

と言いつつ、拳をポキポキ鳴らす真理絵。

だが、新一はシカトをした。

「（こいつに関わるとろくな目に遭わないからな。無視しよう。）」

なんと、新一はそんな事を思っていたのだ。

「ズガン！」

真理絵は新一の背中に正拳突きをした。

「いつてえええええ！」

甲高い悲鳴をあげる新一。

「無視すんじゃねえよ。」

真理絵は蹲^{つずくま}る新一に言った。

恐い、怖いです。顔が鬼になってますよ!?

「おめえに・・・関わると・・・。」

「ズシン！」

新一が泣きながら、途中まで言い掛けると、いきなり真理絵が、前に回って新一の頬を殴った。

「プチン！」

新一の堪忍袋の緒が切れた。

「なんの理由も無しに人を殴るな、よ！」

新一は仕返に真理絵を本気で殴った。

「カーン！」

金属に物が当たった時の音がした。

「いつてえええええ！」

新一は、再び悲痛の叫び声をあげた。

全く、こんな状態で、日本に事件が一つも発生しなくなるんでしょ
うか？

先が思い遣られます。

奥村 真理絵（後書き）

今度の真理絵は攻撃的です。その証拠に、愛する新一に愛のムチ・
・では無く、ストレス発散の為、気に入らない事があると直ぐに人を殴ります。

今まで何度人を殺して来た事か。

ガット
G A Tはこんな危険なサイボーグを始末しなくて良いのだろうか？
それが、良いらしい。と言うか、回収して処分しようと、G A Tが
真理絵を捕獲しようとする、そいつらを殺してしまうらしい。
全く、こんな不良品を作ったのは、何処のどいつだ！？

ダイヤモンド（前書き）

前書き

ダイヤモンド・・・それは、炭素で出来た透明な物体で、ルビーやサファイア、エメラルド等、色々な物がある

。これらは、手にしようとなると、高価な物ばかりで、中々手に入る事が出来ない代物である。しかも、一番硬いらしい。

が、それに勝るものが一つだけある。それは、奥村 真理絵自信である。サイボーグの彼女は、ヒビロノカネ

と言う未知の金属で出来ており、ダイヤモンドの刃でも傷一つ付けられないのだ。この辺りがどう関係して来る

かは、本編を読んで理解して頂きたい、と作者は願っている。

ダイヤモンド

2006年9月。日、本日は、博物館で宝石の展覧会がある。

真理絵と新一は、今、そこへ来ている。

「うわあ、綺麗！」

宝石がズラツと並んでいるのを、端から順番に見ながら、真理絵が目をキラキラ輝かせている。

「ねえ、この赤いの、何て言うの!？」

真理絵が新一に聞く。

「それは、ルビーだ。」

「へえー。」

じゃあ、この緑のは？」

「エメラルド。」

新一は、こうやって、真理絵の知らない事を、一つずつ教えて行く。

「ピンポンパンポン♪」

『これより、当展覧会主催のオーナー、報関ほうせき昭様あきりより、ダイヤモンド

ンドのオークションが開催されます。参加者は、中央ホールまでお越し下さい。』

会場内に放送が入った。

「聞いた聞いた!？」

オークションだって!

行ってみようよ!」

真理絵が騒いだ。

新一は、何か嫌な予感した。新一の嫌な予感は、何時も当たる。

「ねえねえ、行こ!？」

真理絵は新一を誘った。

が、新一は断った。

「行いかあなあいのお?」

真理絵は、拳をポキポキと鳴らしながら聞いた。

「い、行きます行きます！何処へだって付いて行きます！」

新一は、そう言わざるを得なかった。だって、そうだろ？真理絵に殴られたら、痛いだけじゃ済まされないからな。

こうして、二人は中央ホールに向かった。

『これより、方関 昭様のダイヤモンドのオークションを開催します！』

オークション司会者がマイクを通して説明をする。

その横に、ダイヤモンドが置いてあり、ムスツとした顔の男が、その隣で座っている。

彼がダイヤモンドをオークションに掛けた張本人である。

『では、1万円から開始致します。』

「1万円！」

女性が手をあげて言った。

「2万。」

続いて、男が言った。

「3万円！」

「4万円！」

そうして、値段はドンドン上がり、1億円までに跳ね上がった。

『い、1億円です！それ以上出す方、いらっしゃいますか？いなければ、落札とさせて頂きます。』

暫く沈黙が続き、司会者が落札を宣言しようとした時、真理絵が手をあげた。

「1兆円出します。」

「ま、真理絵！？」

真理絵の発言に、新一は驚いた。

いや、それ以前に真理絵が1兆円を持っているのか？

その通り、持っているのだ。

『い、1兆円です、1兆円！』

暫く沈黙が続いた後、司会者が落札を宣言した。

ま、マジで落札しちゃったよ！？

「バチッ！」

急な停電により、会場内が一瞬にして真っ暗になった。

「バリーン！」

ガラスが割れる音がすると、電気が復帰した。

「キャアアア！」

会場内に女性の悲鳴が響いた。

『あ、ただいま、事故がありましたので、オークションは中止とさせて頂きます。』

司会が言つと、ステージに幕が下りてきた。

新一は、幕が完全に下りる寸前の所で、ステージに駆け込んだ。真理絵も、置いていかれまいと、一緒にステージに駆け込む。

「君たち、上がって来ちゃ駄目じゃないか。」

司会者が新一と真理絵の二人に言った。

が、新一と真理絵は司会者をアウトオブ眼中。二人は報関に駆け寄った。

新一は報関に触れた。

「（死んでる・・・刺殺か。）」

「新一君、これ見て！」

真理絵が割れたダイヤモンドのケースを指した。

新一はそれらを調べた。

「これ、ただのガラスだぞ!？」

「きつと、停電中に・・・。」

「そんな馬鹿な!？」

オークション司会者が飛んできた。

「何で、何でガラスに!？」

驚くオークション司会者。

一体、宝石は何処へ行ったのだろうか、報関を殺害したのは誰なのか？

全てが今、謎に包まれた。

ダイヤモンドは見ている（前編）

「それで、電気が点いた時、ケースが割られており、中のダイヤモンドがガラスと入れ替わっており、おまけに持ち主の報関氏まで殺されていた、そう言う訳だな？」

刑事が新一と真理絵の二人に聞いた。

「はい。」

二人は一緒に答える。

「しかしまあ、お前たちもよく事件に巻き込まれるな。」

そう言ったのは、警視庁捜査一課の山路 やまし 拓海 たくみけいぶ 警部だ。

山路警部は、二人の良き理解者であり、仲の良い存在だ。

「警部、被害者の交友関係洗ってきました。」

「ん、ご苦労。」

今のは、山路警部の部下で、高山 たかやま 和彦 かずひこ と言う、見習い刑事だ。結構若い。

で、問題の交友関係はと言うと・・・。

殺された報関 ほうせき 昭の息子 けいすけ の報関 けいすけ 啓介。

オークション司会者の熊田 くまだ 英次郎 えいじろう。

以上の二人だ。

「それで、報関の息子と言うのは、今日は来ているのかね？」

山路警部が高山刑事に聞いた。

「それが、事件直後から行方が解らなくなっているんです。」

行方が解らない・・・どういう事なのだろう？

山路警部と高山刑事は、報関 啓介を搜索しに行った。

それを見送った、新一と真理絵が、会話を始めた。

「息子さん、多分犯人じゃないと思うよ。」

「どうしてそう思うんだ？」

「何となく、だよ。」

真理絵はそう言うと、その場を去った。

「熊田さん。」

新一は、熊田に声を掛けた。しかし、返事は無かった。

「（あれ？）」

熊田がいない事に気付くと、新一は彼を捜しに行った。

その頃、真理絵は、会場の電力室に来ていた。

「此処には無いのかなあ・・・。」

真理絵は何かを探している様だ。

「（あつた！）」

真理絵は何かを見付け、そこへすっ飛んだ。

「（やっぱり、まだ仕掛けが残ってるわ。）」

「コーン、コーン、コーン、コーン」

何者かの足音が電力室に響く。

一方、新一は、熊田を見付け、話をしていた。

「停電中の僕の行動？」

「そうです。教えて下さい。」

「別に、何もしてませんけど。」

「と言う事は、宝石にも報関にも触っていない訳ですね？」

「紛らわしいけど、そう言う事になるね。」

「ありがとうございます。」

新一は会釈をすると、事件現場へ戻って行った。

そう言えば、電力室はどうなっているのだろうか？少し覗いてみよう。

「お嬢ちゃん、迷子かい？」

いきなり、男の人が真理絵に声を掛けた。

「！？」

ビックリした真理絵は、後ろを振り向いた。

「あ、あの、私に何か？」

「いや、此処で何してるのかな、って。」

「そんな事、貴方には関係無いですよ。」

「それが、関係あったりしちゃうんだよね。」

「カチャ」

男は拳銃を出すと、真理絵に突き付けた。

真理絵は静かに両手をあげた。

「言え、此処で何をしていた？」

「それを言う前に一つ聞くわ。貴方、誰？どうせ、死ぬんだから、自分を殺す相手の名前くらい、知っておきたいじゃない？」

「お前に知る権利は無い。」

「シュン！」

男の前から真理絵の姿が一瞬にして消え、次の瞬間には、男の首に腕が巻かれていた。

「そんな物騒な物は下に置いて頂戴。」

男はビビりながら、拳銃を捨てた。

「さ、答えて頂戴。

貴方は誰？」

「ほ、報関 啓介です。」

「貴方が。」

で、何しに来たの？」

「見回りに来ました。」

「見回り？」

「ええ、女の子が電力室に入った、と情報がありました。」

「貴方、警備員？」

「はい。」

「停電中、どこにいたの？」

「事務室にいました。」

「プルルルルル」

啓介の携帯が鳴る。

真理絵は彼を解放した。

啓介は、真理絵から離れる。

「ピッ！」

「はい。」

それが、妙な子に捕まってしまう・・・。

ええ、そちらの方は大丈夫です。」

「ピッ！」

啓介は、電話を切った。

真理絵はその様子を、腕を組ながら見ていた。

ダイヤモンドは見ている（後編）

現場には、二人の刑事と、熊田に警備員らしき人物が集まっていた。
「皆さんにお集まり頂いたのは、他でもありません。」
「どう言う事なのか、と首を傾げる刑事。」

「今回、被害者を殺害し、ダイヤモンドを奪ったのは、報関 啓介さん、貴方です。」

新一は啓介を指差した。

皆さん同時に驚く。

「待ってくれ。」

俺は殺していない！」

啓介は殺害を否定した。

『そう、啓介さんは、誰も殺していない。』

突然、スピーカーから真理絵の声が聞こえ、会場中に響いた。

啓介が驚く。

『啓介さんは、熊田さんにお金で雇われ、犯人の振りをしていただけ。真犯人は、熊田さん、貴方です。』

「これからその全容を話すわ。」

そう言つて、物陰から真理絵が顔を出した。

「真理絵、犯人が熊田さん、ってどう言う事だよ？」
新一が聞く。

「事件当時の状況を思い出して。あの状況で、殺害、ダイヤモンドの交換が出来るのは、現場にいた熊田さんだけよ。」

確かにそうだ。あの時、現場には熊田しかいなかった。だからって、熊田が犯人と言う証拠は無い。

「恐らく、動機はダイヤモンドの窃盗。」

「面白い。だがな、停電が起きた時、俺はこの会場にいた。どうやって、停電を起こしたと言うんだ？」

「タイマーですよ。」

此処の変電室に、各部屋の電気を管理するコンピュータがある。」

「・・・・・・・・。」

顔色が変わる熊田。

「バチッ！」

会場の電気が消え、真っ暗になった。

「3、2、1。」

真理絵が数えると、電気が点いて明るくなった。

「貴方はこうやって、停電を起こし、その間にダイヤを盗み、報閔を殺害したんです。」

タイマーをセットした後が、ログに記録されていましたよ。」

「おい、啓介！」

どうして消さなかった！？」

キレる熊田。

「カチャ」

熊田は、啓介に拳銃を突き付けた。

「お前みたいな使えない奴、殺してやる。」

「やめなさい！」

真理絵が叫んだ。

「パン！」

熊田が真理絵に向けて発砲！

「真理絵！？」

新一が叫ぶ。

「カン！」

真理絵に当たった弾丸は、音を立てて下に落ちた。

「ば、化け物目！」

「パンパンパン！」

熊田は連射した。

「カンカンカン！」

やはり、今度も音を立てて下に落ちた。

「カチ、カチカチ、カチ」

弾切れである。

「ふっ、これならどうだあ!？」

熊田は拳銃を手放し、グレネードランチャーを出して構えた。

「ドーン！」

熊田はグレネードランチャーを発射した。

放たれたグレネード弾は、猛スピードで真理絵に飛んでいく。

「真理絵、避けるんだ！」

新一は叫んだが、時既に遅し。

「ズドーン！」

真理絵にグレネード弾がクリティカルヒット。

爆発と共に、爆風が起き、熊田と真理絵以外は皆吹き飛んだ。煙が晴れると、素っ裸で、無傷の真理絵が立っていた。

あれほどの爆発だ。服は霧散してもおかしくは無いだろう。

「ば、ば、化け物だ！」

「ドーンドーンドーン！」

熊田はグレネードを連射した。

「ズドーンズドーンズドーン！」

巨大な爆発が起きるが、真理絵は傷一つ無い。

熊田は、グレネードを落とし、震えた。

真理絵は、そんな熊田に歩み寄る。

「く、来るな！」

熊田は、懷から、ダイヤモンドで作られたナイフを取りだし、真理絵に向けて構えた。

「近付いたら、お前を切るぞ！」

熊田は言ったが、真理絵は平気で近付く。

「斬れるものなら、斬ってみるよ？」

真理絵はニヤ付きながら言う。

「今、お望み通りにしてやらあ！」

熊田はダイヤモンドで出来たナイフを、真理絵に突き刺した。

「バキッ」

ナイフが真つ二つに折れた。

真理絵には傷一つ無い。

熊田は驚いて腰が抜けてしまった。

真理絵はそんな熊田を、胸倉を掴んで持ち上げた。

「お、お、降ろしてくれ！」

「いいやあだ。」

真理絵は高く可愛らしい声で断った。

「もう好きにしてくれ。」

熊田は力を抜いて言った。

「自首、しますか？」

「し、しますしします！」

それを聞いた真理絵は、熊田をゆっくり降ろす。

「馬鹿目！」

熊田はそう言つて、逃げ出した。

が、目にも留まらぬ速さで、真理絵が熊田の前に移動した。

熊田は真理絵にぶつかり、後ろに引っくり返った。

「ひやあああああ！」

熊田は悲鳴をあげながら、床を這った。

が、再び真理絵が高速移動で熊田の前に移動。

熊田は、もう駄目だ、と観念したのか、その場で動かなくなった。

「あんたみたいな奴、生きていても、特にならないわ。」

「ズシン！」

真理絵は、熊田の頭を踏み潰した。

「グシャ！」

熊田の頭がペシャンコになり、血が吹き出た。

真理絵は返り血を浴び、真つ赤に染まった。

後日、真理絵が行った事は、GATによって揉み消しにされ、犯人は爆発に巻き込まれて死亡、と言う事で片付けられた。

にしても、真理絵が人殺しても捕まらないとは。改めて、GATの凄さを感じた。

ダイヤモンドは見ている（後編）（後書き）

良い子の皆は、真理絵の真似しちゃ駄目です。
絶対捕まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9195a/>

サイボーグ（Cyborg）

2010年10月10日01時31分発行